

論文の内容の要旨

論文題目 重層的 world におけるジェンダーの再編と自己の再定義
- パキスタン人ムスリム移民の妻たち -

氏名 工藤正子

本論文の狙い

本論文は、現代の国際移動を背景に生じるジェンダー関係と自己像の再編のプロセスを、パキスタン人ムスリム男性と結婚をした日本人女性たちの事例から記述・考察するものである。分析において特に着目するのは、自社会で生活する通婚女性の日常に、妻・母、或いは嫁・娘としての役割ゆえに形成される重層的な社会関係の在り方である。そうした生活世界におけるジェンダー関係とその再編のプロセスを記述すると共に、結婚手続きでイスラームへの入信を要請される女性たちが、その後の過程で「改宗ムスリム」としての自己をいかに再解釈・再定義していくのかを考察することが本論文の狙いである。

問題意識

本論文の問題意識は次の3点にまとめることができる。

- 1) これまでの移動のジェンダー分析は主に、家族や単身で移動する女性を対象としてきた。しかし、物理的な移動以外にも様々な意味での「越境」を経験する女性たちが存在し、その「越境」の様態は今後さらに多様化することが予測される。本研究は、「外国人労働者」との通婚をそうした女性たちの越境の一つと捉え、現代の国際移動においていかにジェンダーが他の差異と交差し、女性の役割が再配置されていくのかを明らかにしようと試みる。
- 2) 近年、通婚した女性の経験を、ジェンダー・国家・エスニシティなどの社会・経済的な構造や諸要因との関連で理解することの重要性が指摘されているが、そうした新たな試みでは主に、夫の国で暮らす女性の周縁性に焦点が当てられ、自社会で通婚家族を形成する女性たちの経験は断片的に扱われてきた。自社会に生きつつ、家庭内外において、ジェ

ンダーをはじめとする複数の差異が交差する女性たちの生活世界を理解し、そこで生じる多面的な自己の再定義プロセスに目を向ける必要がある。パキスタン人を夫とした日本人女性たちの経験を明らかにする本論文の試みは、これまで主に「外国人」の経験を通して理解されてきた日本の「多文化化」の状況を、受け入れ社会の成員の側から照射しようとする作業としても位置づけられる。

3) 1980年代以降の日本に増加した超過滞在者との結婚については、日本人女性との結婚により滞在が合法化される男性側の戦略性が強調され、女性の側からの結婚への意味づけは等閑視されてきた。また、通婚女性の意識や実践の変容プロセスを理解しようとする試みでは、夫側の文化に同化するか否か、という二者択一的な視点が取られることが殆どであった。そこには共通して受動的な存在としての女性が想定されており、自社会で多重の周縁性を経験する女性たちの主体的な意識の再構築過程を明らかにしていく必要がある。

議論の概要

法務省統計によれば、2002年末に在日するパキスタン人（正規滞在者）8,225人のうち1,551人が「日本人の配偶者等」のビザで滞在する。その殆どは男性であり、日本人女性との結婚は、「外国人労働者」の来日がピークを越え、滞日長期化が進んだ1990年代に顕著に増加した。本論文の記述は、これら夫婦の居住地が集中する関東圏で40名の日本人女性配偶者を主な対象者として行った調査にもとづいている。調査では、個別の聞き取りと併行して、モスクなどでの女性ムスリムの集りで参与観察を行い、パキスタンでも、夫方親族のもとに滞在する女性たちを中心に現地調査を行った。

本論文は、序論と結論のほか9つの章から構成されている。

序論では、国際労働移動のジェンダー分析、通婚、在日外国人という3つの領域における先行研究を批判的に検討するなかで、本論文の目的と意義を明らかにする。

第1～3章は、議論の背景となる結婚までの経緯を議論する。

第1章では、パキスタン人男性の来日経緯を論じる。まず送り出しと受け入れの双方のマクロな経済要因を概観した後、移動する当事者に視点を移し、親族集団の在り方やその威信獲得への意欲が、人々を海外労働へと駆り立ててきたことを示す。しかし、来日移動はときに親族集団への強い義務感と、個としての自らの欲求との齟齬の中で生じている。そうした状況のなかで、移動者が、送り出し社会に自らをつなぎとめる象徴的行為としての送金によって、親族内における男性としての威信を確立していることを指摘する。

第2章では、女性たちが「外国人労働者」の夫たちと出会い、結婚を決断するまでの経緯を論じる。パキスタン人男性との結婚増加が、国際労働移動だけでなく、日本におけるジェンダー構造や女性の結婚観の変容を含めた、より広い社会的プロセスの中から生じたものであることを示す。

第3章は、実際の結婚成立までに女性たちが直面する、日本とパキスタン双方での他者イメージや、双方の国家から要請される手続き - イスラームへの入信や、夫の在留資格の

取得 - が、結婚初期の生活経験と認識にいかん作用したかを論じる。

第4～9章は、結婚後に女性たちの日常に現われてくる重層的な文脈を個別に論じる。

まず、第4章では、滞日長期化に伴う在日パキスタン人男性のネットワーク形成を、自営業への移行や、モスク設立などの「イスラーム」的な空間の出現に着目しつつ論じる。自営業への移行については、妻の日本人としての様々な資源が動員される点も指摘する。

第5章では、上記のような男性ネットワーク形成のなかで、送り出し社会の概念である「パルダ（男女隔離）」や、その実践に依存する男性の「イザト（名誉）」の概念が再構成されてきたことを論じる。その過程では夫の名誉のために、日本人女性配偶者たちが「慎ましい」妻として、パキスタンのシャルワール・カミーズやドゥパッターを身につけることを期待されるようになる。

しかし、そうした実践が在日パキスタン人の眼差しを意識した状況的なものにすぎないのに対し、第6章では、より「本来のイスラーム」に基づいたヒジャブを、日常を通して被り始める女性たちに着目する。その背景には、夫たちの関係性とは大きく独立して形成される日本人女性ムスリム同士の勉強会その他の集いがある。そこでの関係性を通じて、結婚時点の「形だけの入信」から「第二の入信」と呼ばれる、より意識的な「ムスリム」としての自己規定が生まれるプロセスを、個々の聞き取り結果をもとに記述する。

第7章では、こうした女性の集りの場に焦点を当て、参加者同士の経験の共有や再解釈を通して「本来のイスラーム」が共同で構築される状況を記述・考察する。強調するのは、そこで、夫やパキスタンの夫方親族で見た「イスラーム的」実践が、より批判的に捉え直される点である。そうした相互行為を通じて女性たちは、「ボーン・ムスリム」というカテゴリーの構築とそれとの対比のもとで、イスラームを意識的に学び、選択する「改宗ムスリム」としての自己像を共に構築していく。しかし、女性たちの集りにおいてそうした強い求心力が働く一方で、参加者は相互に様々な差異も感じており、そうした差異の認識と解釈によって、更なる自己像の精緻化がはかられている点にも注意する。

第8章では、家庭内領域、特に、夫方親族との関係性とムスリムとしての子育てに焦点を当てる。まず、パキスタンへの送金や親族の相互訪問の状況と、それらの行為が女性たちにもつ意味合いを論じる。次に、日本で子の「イスラーム的身体」を育成する上での女性たちの役割を明らかにする。最後に、日本とパキスタン、或いは第三国という複数の拠点をもつ家族形態が近年出現しつつあることを指摘し、その背景に、夫方親族の経済戦略や子の宗教教育だけでなく、様々な要因が複合的に関与していることや、通婚女性の多重的な役割が、家族の分散によって再配置されていくことを示す。

第9章では、子が就学期を迎える中で重要となる、地域社会での関係性に目を向ける。女性たちは、ここまで論じてきた重層的な文脈を生きつつ、「妻」「母」として、非ムスリムが主体の地域社会との媒介役割を果たすようになる。そうした役割を果たすなかで、「日本人」でありながら「ムスリム」である女性たちの「矛盾」に主流社会から向けられる眼差しは、「改宗ムスリム」としての更なる自己の再定義プロセスや衣の実践の再構成へとつ

ながっている。この章では、自社会で多重な周縁性を共有するパキスタン人の日本人女性配偶者の間に強固な「我々」意識が形成されていることや、その一方で、日本で別の周縁性を経験するマイノリティとの結びつきが生まれていることも指摘する。

以上の章で示されるように、自社会に生きる女性たちの日常には重層的な文脈が構成されるが、女性たちは、その間を単に往還するだけでなく、自社会との媒介役割などの多重役割を担うがために、常にそのそれぞれを参照せざるをえない日常を生きている。このように複数の参照点をもつことで、女性たちによって「女性」や「改宗ムスリム」であることの意味が絶えず再解釈され、その結果、単に夫たちへの「同化」か否かという図式には還元できない意識と実践の変容プロセスが生まれている。

結論では、ここまでの議論を総括した上で、1) 通婚女性の身体実践にみる文化の再生産役割と、2) 女性の労働の再配置という二つの観点から本論文の事例が示唆するところを考察する。最後に、単身で移動した男性と婚姻関係を結んだホスト社会の女性の位置には、移民女性とは別のかたちで様々な差異と力関係が複雑に入り組んでおり、その状況を明らかにするには、男性側の「名誉」の言説や、女性の複合的な周縁性を理解するだけでなく、そうした状況に対する女性たちからの能動的な意味づけにも注意を払う必要があることを指摘する。